

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：32305

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00419

研究課題名（和文）19世紀イギリス小説における 海を行くスコットランド人 と越境

研究課題名（英文）"Sea-faring Scots" in 19th Century British Novels and Border-crossings

研究代表者

松田 幸子 (Matsuda, Yoshiko)

高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：10575103

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究によって、19世紀における海を越えた移動の過程でのスコットランドのナショナル・アイデンティティの形成のありようについて明らかにすることができた。とりわけ、少年向けの冒険小説家であるR.M.バラントインによる自伝的小説と、同時代の北へ向かったスコットランド人冒険家らの言説を分析することで、北を探求するスコットランド人が、どのように自己成型を行っていたのかを確認した。これらの分析によって、スコットランドのアイデンティティ形成は、北の地と自らを差異化するというよりはむしろ、北に同化しつつ、スコットランド性を保とうとする独自のものであることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、19世紀の北極・北米大陸探検が、ハドソン湾会社などの貿易会社主導のもと、アレグザンダー・マッケンジーやジョン・レイらのスコットランド人探検家によって推し進められたことを確認できた。本研究では、これらの北アメリカの貿易会社の従業員の多くが、スコットランド出身者からなっていたことをふまえて、19世紀の 海を行くスコットランド人 の代表としてR. M. バラントインの著作を再評価するとともに、スコットランド人越境者のナショナル・アイデンティティ形成の様子について精査し、北の海を行くスコットランド人の、境界を越えた自己形成のありようを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This study has allowed us to shed light on the formation of Scottish national identity in the process of transoceanic migration in the 19th century. In particular, by analyzing autobiographical novels by R.M. Ballantyne, an adventure novelist for boys born in Edinburgh, and the discourses of contemporaneous Scottish adventurers such as John Rae, who headed north in the initiative of Hudson's Bay company, we have confirmed how Scots who explored the northern seas established their identities. These analyses reveal that Scottish identity formation was a unique attempt to preserve Scottishness while assimilating to the North, rather than to differentiate themselves from others.

研究分野：19世紀イギリス小説

キーワード：Scottishness ナショナル・アイデンティティ 越境 北米大陸探検

1. 研究開始当初の背景

1707年の合同法(Acts of Union)によってイングランドとスコットランドからなるグレートブリテン王国(Kingdom of Great Britain)が成立した際、スコットランドはその独立性を失った。二度にわたるジャコバイトの反乱(1715年、1745年)氏族制度の解体、ハイランド・クリアランス(Highland Clearance)等の政策によって、長い18世紀を通して、スコットランドは次第にその文化的独自性をも失い、イングランド化していったとされる。

しかしながら、またはそれゆえに、18世紀、イングランドとは異なるスコットランドの文化的独自性を発見しようとする動きも生まれる。例えばアラン・ラムジー(Allan Ramsay)やロバート・バーンズ(Robert Burns)といった詩人は、スコットランド・バラッドの収集・編纂を通して「優しく甘美な自然」としてのスコットランド像を立ち上げていった。このような動きは、19世紀前半のサー・ウォルター・スコット(Sir Walter Scott)によるウェイヴァリー小説群(Waverley Novels)によって頂点に達する。スコットは、すでに失われた、あるいは失われつつあるスコットランド、とりわけハイランドの過去をロマンティックな記憶として留めようとしたのである。

その一方、18世紀後半から19世紀にかけて、スコットランドは大英帝国の発展を牽引する地位を確立していった。グラスゴーでは鉄鋼業や造船業が発展し、またエディンバラではエディンバラ大学を中心としたスコットランド啓蒙(Scottish Enlightenment)がその後の近代思想・産業技術の礎を築いた。スコットランドの都市は世界的な交易港として栄え、そこでは世界に先駆けて都市化・工業化にともなう移民・貧困の問題等の、現代的な課題が生じ始めていたのである。

ウェイヴァリー小説群等のハイランドを舞台とした歴史小説は、このような急激な変容に失われた過去を語り直すことで対応しようとしたといえる。いわばこれは自己に内在する(はずの)記憶の中から、スコットランド的なもの(Scottishness)を呼び起こそうとする態度であり、内なるスコットランドの探求であるといえる。一方、本研究が対象とするのは外なるスコットランドである。大英帝国に組み込まれ、産業化・工業化していくスコットランドの都市がある一方で、そこからこぼれ落ちる人たち、自ら故郷を離れる人たちも存在した。19世紀の小説の中で、彼らはしばしば海を行くスコットランド人として表象される。大英帝国がその領土を拡張していかうとする過程において、彼ら海を行くスコットランド人たちは、船乗り、軍人、探検家、技師、医者、宣教師、博物学者、文筆家として、アメリカ大陸、アフリカ大陸、アジア、オセアニア、そして南洋諸島を広範に行き来していた。彼らは、急速に変容しつつあったスコットランドの外にありながら、越境し続けることでスコットランド的なものの形成に寄与していったと考えられるのである。

このような越境を通してのスコットランド的なものの形成について、エディンバラ出身で自身も海を行くスコットランド人であったロバート・ルイス・スティーヴンソン(Robert Louis Stevenson)は、(故郷を離れた)ローランドのスコットランド人も、スコットランドに戻ってきた際ハイランドを故郷だと感じると述べ、スコットランドのナショナル・アイデンティティが、自らの真の出自とは無関係に外部との接触によって創造されることへの戸惑いを表現している。海を行くスコットランド人は、19世紀の島・海洋を舞台とした小説において、時に大英帝国の拡張主義を担うエージェントとして、時に大英帝国の枠からはみ出した無名の越境者として表象される。大英帝国に組み込まれた他者として、スコットランド人はたとえブリテン島の外部にあっても、帝国と共謀しながら、あるいは帝国に抵抗しながら自らを規定せざるを得なかった。このようなスコットランド人のナショナル・アイデンティティの構築に越境がいかにかわるのかという問いが、研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、海を行くスコットランド人の多様なありようを、19世紀の島・海洋を舞台とした小説から明らかにしようとするものである。これは、自らの過去からスコットランド的なものを見出そうとする内なるスコットランドへの動きを追うことから離れ、広範囲な移動による絶え間ない他者との接触からスコットランドらしさが形成される過程を追う、いわば外なるスコットランドの作用を検討する試みだ。19世紀の小説における海を行くスコットランド人の表象を通して、越境の過程でナショナル・アイデンティティがいかに多様に形成されるのかを明らかにすることが、本研究の目的である。

3. 研究の方法

19世紀、海を行くスコットランド人がどのように外なるスコットランドを見出したのかを明らかにするために、本研究は19世紀の旅・海洋を舞台とした小説に加えて、実際に海に出たスコットランド人の旅行記を分析の対象とした。

a) 海を行くスコットランド人についての資料収集・調査

スコットランド国立図書館(National Library of Scotland)とエディンバラ大学図書館(The University of Edinburgh Library)において、ProQuestが提供するオンライン・データベース

British Periodicals Online を用いて、『ブラックウッド・マガジン』(*Blackwood's Magazine*, 1819-1980) や『スコツツマン』(*The Scotsman*) 掲載の、北へ向かう航海に関する記事を参照しつつ、それらの図書館所蔵の 海を行くスコットランド人 の手記を収集した。特に、ステューヴンソンや少年向けの探検小説で知られる R. M. バランタイン(Robert Michael Ballantyne) の旅に関する記事と、彼らの故郷であるエディンバラに関するエッセイ等を読み比べることで、越境したスコットランド人小説家らのスコットランドへの所属意識について分析した。

b) 海を行くスコットランド人 表象の分析・解明作業

上記の資料収集・調査と合わせて、19 世紀の島・海洋を舞台とした小説のなかで、スコットランド人がどのように表象されているのかを分析した。とりわけ、同時代のスコットランドに、北極・南極や北米への航海・探検を志向する動きがあったことをふまえて、バランタインの北米大陸での体験記と冒険小説を読解し、19 世紀、北極海を超えた資本のネットワークに組み込まれていたスコットランドが、いかなる自己形成を行いながら スコットランド的なものを構築していったのかを明らかにした。その際、スコットランドの記憶を通してのナショナル・アイデンティティの形成について論じたマレー・ピトック(Murray Pittock) の著作(*Celtic Identity and the British Image*, 1999) 等を参照しながら、そのような 内なるスコットランド とは異なる 外なるスコットランド がいかに意識されていったのかを解明した。

4 . 研究成果

a) 概要

研究課題である「19 世紀イギリス小説における 海を行くスコットランド人 と越境」の研究実績は(1)スコットランド国立国会図書館とエディンバラ大学図書館におけるスコットランド人越境者の再発見、(2)スコットランドの越境者と北アメリカ大陸北部の探検の関係の精査である。2023 年夏にスコットランド国立国会図書館とエディンバラ大学図書館において行った調査において、19 世紀に起きていた探検ブームには、数多くのスコットランド人が関わっており、その中でも北極探検は、アレグザンダー・マッケンジーやジョン・レイらのスコットランド人探検家によって推し進められたことを確認できた。北極探検は、大西洋から太平洋に抜ける北西航路を探求する、北アメリカ大陸北部の探検と結びつき、貿易会社の主導によって行われていた。本研究では、これらの北アメリカの貿易会社の従業員の多くが、スコットランド出身者からなっていたことをふまえ、19 世紀に北アメリカでの毛皮取引を独占していたハドソン湾会社所属の 海を行くスコットランド人 の代表として、R. M. バランタインの著作の調査を行った。

バランタインはエディンバラ出身の作家で、19 世紀の少年向け冒険小説というジャンルを確立した人物である。16 歳でハドソン湾会社に雇われ、北アメリカに渡った。その時のことを回想した『ハドソン湾、あるいは北アメリカの荒野での毎日の暮らし』(1848) を分析し、スコットランド表象や、スコットランド人越境者のナショナル・アイデンティティ形成の様子について精査した。バランタインは、北アメリカという過酷な土地において、ネイティヴ・アメリカンやフランス系の混血である「運び屋」と関わる中で、自身の血統を意識しつつも、境界のない共同体を築いていこうとする。北の海を行くスコットランド人の、境界を越えた自己形成のあり様を明らかにすることができた。

b) R. M. バランタインの著作の再評価

バランタインには、90 冊を超える著作があるが、その多くは少年向けの冒険小説であり、中でも北アメリカを舞台にしたものは 20 冊に及ぶ。父はウォルター・スコット(Sir Walter Scott) の原稿を転写・印刷していたアレクサンダー・バランタイン(Alexander Ballantyne) で、叔父のジェームズはその印刷を請け負っていた。そのため、1826 年のスコットの破産によってバランタイン一家も困窮することとなる。ロバートは、16 歳の時、北アメリカの毛皮貿易を担っていたハドソン湾会社(Hudson's Bay Company) に職を得る。これは、親戚に会社の総督(Sir George Simpson) の妻(Frances Ramsay Simpson) がいたためであった。1841 年に年 20 ポンドで 5 年の契約で事務員として雇われ、ハドソン湾沿岸にあるヨーク・ファクトリー(York Factory) に配属となる。その後レッド・リバー入植地(Red River Settlement)、ノルウェイ・ハウス(Norway House) と次々に転属し、1847 年にタドゥーサク(Tadoussac) を最後の配属地として、北アメリカ大陸を離れる。エディンバラに戻ったバランタインは出版社に職を得るが、ハドソン湾会社時代に母親に宛てて書いていた長く詳細な手紙を気に入った一家の友人の女性によって、カナダでの経験を回想した『ハドソン湾』(*Hudson's Bay, or, Every-day Life in the Wilds of North America*, 1848) を出版する。これを読んだエディンバラの出版社のウィリアム・ネルソン(William Nelson) が、少年向けに自分の冒険をもとにした物語を書くことを勧め、1856 年に『若き毛皮商』(*Snowfalkes and Sunbeams, or, the Young Fur Traders*) がロンドンで出版される。その後もカナダでの冒険を描いた作品に加え、南太平洋を舞台として『珊瑚礁の島』(*The Coral Island*, 1857) やアフリカを舞台とした『ゴリラ・ハンターズ』(*The Gorilla Hunters*, 1861) などで人気を博し、30 年間の間彼の作品はいくつも版を重ねた。なお、これらの作品の挿絵の多くはバランタイン自身の筆によるものである。彼の作品に影響された作家の

ひとりが、同じくエディンバラ出身の R. L. スティーヴンソン (Robert Louis Stevenson) である。スティーヴンソンは『宝島』(Treasure Island, 1883) の序文に掲げた詩において、彼を “Ballantyne the brave” と称している。バラントンは 1848 年の姉の死以降、信仰を強め、24 歳の時にスコットランド自由教会の長老に選ばれた。メニエール病を患い、1894 年に療養先のローマで死去した。

c) 北へ向かうスコットランド人の再評価と北でのナショナル・アイデンティティ形成

バラントンの著作を分析することで、本研究では南洋への航海とは異なる北への探索と、スコットランド人の北での自己形成のありようを理解することが出来た。北極海の航海や北米大陸の探索で出会う自然を、バラントンは基本的には崇高かつロマンティックなものであるととらえている。一方、スティーヴンソンが言説化した南洋とは異なり、バラントンのにとってとりわけ冬期の北の探求はきわめて過酷な、道標のない旅程である。ハドソン会社主導による、北極探検と北西航路の探索に携わったスコットランド人探検家であるジョン・レイ (John Rae) やトマス・シンプソン (Thomas Simpson) らへの言及から、バラントンを、同時代の北極・北米探検と、トランスアトランティックな人とモノの移動のネットワークの中に位置づけ、このような北で展開されていたネットワークにスコットランド人が数多くかかわっていたことを説明することができた。また、その際、バラントンやレイをはじめとするスコットランド人たちは、過酷な北の自然において、自らのスコットランドらしさを強く打ち出すというよりは、北の人・モノのネットワークに同化しようとする志向性を示している。ハドソン湾会社に関わるネイティヴ・アメリカンやフランス人らとともに、北米を境界線のない共同体として想像しているバラントンの著作から、スコットランド人の血統を保ちつつ、北に土着化しようとする、独自の外なるスコットランド意識の形成を確認することができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yoshiko Matsuda	4. 巻 3
2. 論文標題 Modern Japan Traveling to Island	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Lisaniyat Studies	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 The Tempestと17世紀における 島 の変容
3. 学会等名 第92回日本英文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松田幸子
2. 発表標題 バランタインと北への探求
3. 学会等名 オペロン会11月例会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------